

Hebrews Overview; “Better than All the Rest” August 18, 2024

へブル人への手紙の概要；「他のすべてのものよりもすぐれている」2024年8月18日

I. 歓迎の挨拶

- A. グッドモーニング！おはようございます！カルバリー教会岩国によろしくお越しくださいました。皆さんと一緒に主を礼拝し、共に神の御言葉を学ぶためにここに戻ってくる事ができて本当にうれしいです。
1. 説教壇に立つのは数週間ぶりです。妻と私は、結婚25周年を祝うために出かけました。そして、カリフォルニア州テメキュラにあるカルバリー教会聖書フェローシップからチームがこちらに来て、私たちと共に様々な役割を奉仕してくれました。VBSの手伝い、公園でのコンサートの進行、日曜学校の教える人たちの代役を務めたり、私の代わりに説教壇に立ってくれたりしました。
 2. 私は、離れていた時間と私たちのゲストから語られた言葉を楽しみましたが、神の御言葉を通して通常の聖書の学びに戻ることにワクワクしています。
 3. 新しく訪れた方々やオンラインを通して礼拝に参加している方々も歓迎します。
- B. 礼拝を進めていく前に、小学生の子供たちは日曜学校のクラスに行ってもらいましょう。
1. バイブルイングリッシュクラスも同様に行ってください。(第二礼拝のみ)
- C. ピレモンへの手紙の学びを終えたのは1か月以上も前のことです。通常であれば、次の書に進んでいくはずでした。
1. 日曜日の朝、ここカルバリー教会で私たちが望んでいることは、新約聖書を一書ずつ、一章ずつ、一節ずつ教えることです。それは、神の御言葉が何を語っているのかを知り、理解し、それを私たちの生活に適用していくためです。
 2. 旧約聖書に関しても、私たちは同じアプローチで、水曜日の夜、週の半ばに旧約聖書を学びます。
 3. しかし、ゲストスピーカーの予定もありましたし、新しい書のいつもの前置きや概要の学びに触れた後に、1か月後に戻って来ることはしたくはありませんでした。
- D. しかし、今日からはもう待つ必要はありません。今日から、新しい学び、新約聖書の新しい書、へブル人への手紙に進んでいきます。皆さんも私と同じように、この学びを楽しみにしていると思います。
1. さて、皆さんに前もって警告しておきたいと思います。今朝始める書は、一部の人々に混乱を招いた書です。ご存じのように、著者が書いているように、彼は読者が、率直に言って今日多くの人が完全に理解していないかもしれない特定の事柄について、一定の共通知識を持っていることを前提としています。
 - a. へブル人への手紙を読みながら、旧約聖書から歴史的な事柄をた

くさん話していくつもりです。ヘブル人への手紙は、おそらく旧約聖書の最高の注解書であり、モーセの律法とレビ記の契約の最高の注解書でもあります。ですから、多くの旧約聖書の資料を相互参照することになります。

- b. この書は、私たちの組織神学やある物事に対して私たちの見方を揺さぶるでしょう。この書は、人が作り上げた神学体系にうまく当てはまらないからと、この本を読むのを避ける人もいます。
- c. 挑戦することを恐れないうでください。心を開いて、神が語る御言葉に自分自身の身を委ねてください。自分の神学的見解にうまく当てはまらないからとって、ヘブル人への手紙に書かれていることを捻じ曲げたり、否定したりしないでください。それがもたらす緊張感を受け入れ、主がそれを乗り越えてくださるようにしてください。

2. ヘブル人への手紙は、新約聖書の他の手紙とは違います。個人的な手紙というよりも、説教のように読めます。

- a. 暴投の挨拶もなければ、前置きもありません。いきなり本題に入っています。
- b. 個人的な手紙というよりも、実に激励の言葉です。

3. そして、時には説教のようにも読めますが、祝福（祈祷）の言葉、最後の励まし、別れを分かち合うという点では手紙のように終わっています。新約聖書の他の多くの書物がそうであるように、恵みへの勧めの励ましで終わっています。

4. ヘブル人への手紙は、新約聖書の他の書物に見られるような多くのパターンには当てはまりません。ただ、他の全ての書簡とは少し異なっています。

E. 今朝は、一節ずつの学びに入る前に、この書の概要を説明したい。

1. ですから、今朝は、もう少し学術的な内容になります。ヘブル人への手紙の学びを始めるにあたり、学びの土台となる事柄について見ていきます。
2. この手紙を学んでいくために、意欲と興味をそそるような、いくつかの背景となる情報を見ていきます。
3. 著者、読者、背景、時期、手紙の全体的なテーマなどを見ていきます。
4. そして、私の願いは、このような背景情報をすべて理解することで、神がそれを通して語ろうとしている素晴らしい真理を、私たちが聞き取るための準備がより整うということです。

F. さて、神の御言葉に触れるために、1章の最初の数節を読んでいきましょう。しかし、その節の解説は来週にしていきます。

1. 概要と最初の3節を読み終えるには、おそらく皆さんが心地よいと感じるよりもずっと長い時間、ここで皆さんにお待たせすることになります。そこで、私たちは、聖書を読み、背景情報をすべてカバーし、来週から聖書の解説を始めます。

2. 聖書のヘブル人への手紙を開いてください。開きましたら、神と神の御言葉に敬意を表して起立してください。
3. 最初の3節だけを読みます。説明しましたように、この著者は時間を無駄にすることなく、すぐに本題に入っていきます。私は私の聖書を読んでいますので、あなたのご自分の聖書を読みながらついてきてください。ヘブル人への手紙、1章1節には次のように始まっています。(R & P)

II. 背景情報

- A. それでは、私たちと長い間共に過ごしている方はご存知でしょう。新しい学びが始まるたびに、このような学びの書の概要を説明するのが私が好きなのを。
 1. 私たちは通常、その背景となる情報にかなりの時間を費やし、手紙の挨拶や冒頭を取り上げるだけです。しかし、ヘブライ人への手紙には、本題に入り込んでいくための優しい始まりの言葉や挨拶はありません。
 2. いきなり本題に入ってしまうので、私は学びをした後に、最初の3節の学びを始めて吟味してみると、概要を説明することはできないと判断しました。そこで、今日は概要だけ見ていくことにします。来週は、最初の数節で著者とともに本題に入っていきます。概要の題名は、「他のすべてのものよりもすぐれている」です。
- B. 概要については、学びを始めるにあたって、いつも同じ質問をしています。著者についての質問から始めます。誰がヘブル人への手紙を書いたのでしょうか？
 1. ヘブル人への手紙は、新約聖書の他の書物とは違います。新約聖書の中で唯一、著者が不明な書物です。
 2. この手紙のどこにも、著者が自分の名前を明かしている箇所はありません。これはヘブル人への手紙だけではなく、新約聖書の他の書物にも、著者が自分のことを特に名乗らないものがあります。
 - a. マタイの福音書、マルコの福音書、ルカの福音書、そしてヨハネの福音書は、その記述の中で自分たちのことを特に特定していません。しかし、初代教会は、これらの福音書を書いたのが彼らであることを知っており、彼らを福音書の著者として特定したのです。
 - b. ヨハネの手紙第一、第二、第三では、使徒ヨハネが著者であるとは特に明記されていませんが、初期の教会はヨハネを知っており、彼の手紙も知っていました。これらの記述の著者としてヨハネを明確に特定していました。そして、ヨハネはこれら3つの書簡の著者として広く認められています。
 - c. 使徒の働きでは、ルカが誰なのか特に認識されていませんが、読み進めていくと、使徒の働き16章で、ルカがトロアスでパウロに加わった時に代名詞が「彼から」から「私たち」に代わっていることから、ルカがいつこの記述に登場したかが分かります。
 3. ですから、著者が自分であることを明らかにしていない書物の場合、著者の身元を確認するには、その書物の内部の証拠、または初代教会とその伝統に関する外部の証拠に頼らざるを得ない。
 4. 残念なことにヘブル人への手紙は、初代教会の伝統は、誰がヘブライ人へ

の手紙を書いたのかということに関して一致していません。

- a. 教会の多くの人々は、パウロがこの手紙を書いたと考えていました。実際、東方教会ではヘブル人への手紙をパウロの14の書簡の1つとして受け入れていました。
 - b. 私は1900年代初期のキングジェームズ版聖書を持っています。その聖書で、ヘブル人への手紙の見出しには、「使徒パウロのヘブル人への手紙(書簡)」と書かれています。そこで、私たちの聖書の見出しは、神の靈感を受けた御言葉の一部ではなく、編集した人によって加えられた者です。しかし、言うまでもなく、パウロが著者であるという考えは、長年にわたって多くの学者によって支持されてきました。
5. しかし、ヘブル人への手紙の中には、パウロの著者に関して疑いを思わせるような箇所がいくつかあります。
- a. 1つは、もしこれがパウロからの手紙だとすれば、パウロの手紙の中で唯一、自己紹介で始まっていないことです。パウロが書いたものとされる他の手紙はすべて、読み手に彼自身を示す方法として「パウロ」という言葉で始めています。ローマ人への手紙、コリント人への手紙第一と第二、ガラテヤ人への手紙、エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、テサロニケ人への手紙第一と第二、テモテへの手紙第一と第二、テトスへの手紙、ピレモンへの手紙は、どれも全く同じ「パウロ」という最初の言葉で始まっています。ヘブル人への手紙にはそのような出だしはありません。
 - i. さて、パウロは異邦人への使徒と認識されていたので、ヘブル人への手紙の中で自分の名前を明かすことを望まなかったと言う人もいます。
 - ii. また、パウロが異邦人への使徒として知られていたため、ユダヤ人の中には、パウロが自分の民に背いているかのようにパウロを見下す者もいたと言う人もいます。そのため、パウロが著者であることを支持する人々は、パウロがユダヤ人に送ったこの特別な手紙の中で自分を名乗らない理由として、このことを挙げるのです。
 - iii. そして、おそらくそれが起こったのでしょう。確かなことは言えませんが。
 - b. パウロが著者であることを疑う人がいるもう一つの原因は、ヘブル人への手紙2章3節に書かれていることにあります。

「3 私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、どうしてのがれることができます。この救いは最初主によって語られ、それを聞いた人たちが、確かなものとしてこれを私たちに示し、」
(ヘブル人への手紙2章3節)

 - i. これに基づくと、著者と読み手は、他の目撃者を通して間接的に福音のメッセージを聞いた人々であったようです。
 - ii. 彼らはいわゆる二世信者である。主から直接聞いたから信仰を持ったのではなく、主から直接聞いた他の人々から説教されたメッセージを聞いて信仰を持った人です。

- iii. もしこの著者が、福音を間接的に聞いた人だとしたら、パウロは候補者から外れることとなります。パウロはその手紙の中で、主ご自身から聞いたこと、主によって宣教に召されたことを強く主張しています。
- iv. 使徒の働き 9 章で、イエスはダマスコへの道すがらパウロを訪ね、「4 サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか？」と直接語りかけています。5 「彼が、「主よ。あなたはどなたですか」と言うと、お答えがあった。**わたしは、あなたが迫害しているイエスである。**」(使徒の働き 9 章 4 節－5 節)
- v. また、ガラテヤ人への手紙ではパウロは次のように述べています。「11 兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。12 私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。」(ガラテヤ人への手紙 1 章 11 節－12 節)
- vi. パウロが人間から福音を受けたのではなく、キリストからの直接の啓示によって福音を受けたことは、パウロ自身の著者から非常に明らかです。ですから、著者が二世信者であるという考えは、パウロの改宗という記述に当てはまりません。
- c. ヘブル人への手紙のギリシャ語は、パウロの他の手紙のどの手紙よりも洗練されていると指摘する学者もいます。
 - i. 私にとって、それはパウロが、この手紙を書けなかったという意味ではなく、パウロの他の手紙とヘブル人への手紙のギリシャ語には顕著な違いがあるということです。パウロは教養があり、その気になればギリシャ語で洗練された手紙を書くことができたはずです。
- d. そして、この手紙の内容です。率直に言って、パウロが他の手紙のどの中でもあまり語らなかつたことに焦点を当てています。
 - i. 繰り返しますが、これはパウロが新しい話題や新しい考えについて書くことができなかつたという意味ではありません。ただ、内容に顕著な違いがあることを示しています。
- 6. もし、パウロでなければ、誰がヘブル人への手紙を書いたのでしょうか？ 誰が書いたかを探す名前のリストはかなり長く、憶測はあちらこちらで飛び交っているようです。ここでは、有力な候補者と彼らがリストに載っている理由をいくつか紹介します。
 - a. ヘブル人への手紙とアポロを結びつける人もいます。アポロについては主に使徒の働きに書かれていますが、コリントへの手紙第一とテトスへの手紙にも出てきます。
 - i. アポロはユダヤ人で、エジプトのナイル・デルタの西端にあるアレクサンドリアの出身でした。アレクサンドリアにはヘレニズム世界の文化・教育の中心地あり、アポロはギリシアとユダヤ両方の学問の中で育ったはずです。
 - ii. 使徒の働きによれば、彼は雄弁な人で、聖書に強いと記されてい

ます。

「24 さて、アレキサンドリヤの生まれで、雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。」(使徒の働き 18章 24節)

- iii. 彼は霊に熱心な人であり、大胆に信仰を分かち合う人でした。
「28 彼は聖書によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人たちを論破したからである。」(使徒の働き 18章 28節)
 - iv. アポロは二世信者という表現がぴったりです。彼は、バプテスマのヨハネの働きを知っていたが、エペソでアクラとプリスキラに遭って神の道をより正確に説明されるまで、その全貌を知ることはありませんでした。
「26 彼は会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に説明した。」(使徒の働き 18章 26節)
 - v. アポロがヘレニズム時代で育ち、ギリシャ語に精通し、聖書を理解していたことから、アポロが著者と見るのも理にかなっているでしょう。
 - vi. アポロはユダヤ人に激しく反論し、聖書からイエスがキリストであることを示したことで知られているので、この手紙はユダヤ人に向けて書かれてたものであり、イエスがユダヤ人が待ち望んでいた答えであることを伝えるために書かれたのですから、彼がこの手紙の著者と見るのは理にかなっています。
 - vii. ヘブル人への手紙の一部がパウロから来たように聞こえると言う事実は、必ずしもアポロを排除するものではありません。なぜなら、パウロがテトスへの手紙を届けるためにアポロを送ったように、アポロとパウロは宣教において共に働き、共に時間を過ごしたことが分かっているからです
 - viii. アポロがその候補であることは間違いなさそうですが、アポロがこの手紙を書いたとする初代教父は、いたとしてもそれほど多くはいません。そして、これは乗り越えるのが難しい障壁となります。彼についての記述や彼の宣教が、ヘブル人への手紙に書かれていることと一致するからといって、彼が書いたとは限りません。
- b. もう一人の有力な候補者は、励ましの子、バルナバである。
- i. バルナバはキプロス島生まれのユダヤ人です。使徒の働き 4章 36節によれば、彼はレビ人でした。
「36 キプロス生まれのレビ人で、使徒たちによってバルナバ(訳すと、慰めの子)と呼ばれていたヨセフも、」(使徒の働き 4章 36節)
 - ii. もちろん、ヘブル人への手紙の著者が、レビ人の律法や祭司の仕事に非常に精通していることを考えると、これは興味深いことです。レビ人として、バルナバは、祭司職に関するレビ律法に精通していたはずで

- iii. バルナバは明らかに使徒パウロと非常に親密な関係にあり、早い時期から一緒に宣教のパートナーとして働いていました。このことは、ヘブル人への手紙にパウロ的な特徴が見られる部分を説明できるかもしれません。
- iv. ヘブル人への手紙の最後には、テモテが解放され、著者がテモテと一緒にこの手紙の受取人に会いに行く可能性があることが書かれています。
「23 私たちの兄弟テモテが釈放されたことをお知らせします。もし彼が早く来れば、私は彼といっしょにあなたがたに会えるでしょう。」(ヘブライ人への手紙 13 章 23 節)
- v. テモテが救われたのは、パウロがテモテの故郷リストラに最初の宣教旅行をした時だと考えられています。パウロとバルナバが最初の宣教旅行で一緒に行動していたところを見ると、バルナバはテモテとも面識があったはずで、後にテモテとパートナーとなった可能性は十分にあります。
- vi. バルナバが候補者の可能性として注目されるもう一つの理由は、初期の教会の教父たちの中には、実際にバルナバが、ヘブル人への手紙を書いたと認めている人もいるからです。
- vii. ラテン語神学の父として知られるテルトゥランは、2世紀後半から3世紀初頭のキリスト教作家です。彼は、ヘブル人への手紙から引用し、その引用をバルナバの手紙に当てはめました。
- viii. バルナバがヘブル人への手紙を書いたと言う見解は、後年、ジェロームによって言及され、4世紀の他の数人の作家によって再び登場しました。
- ix. これはバルナバが著者であることを証明するものではないが、彼を有力な候補者として挙げる理由にはなります。
- x. バルナバがいつエルサレムの教会に加わったかはわかりません。イエスの時代にエルサレムにいたので、二世信者という表現には当てはまらなかったのではないかという推測もあります。しかし、彼がいつキプロスからエルサレムに移ったのか、はっきりしたことは言えません。ですから、これは曖昧なのです。
- c. 他にも言われている説があります。ルカの福音書や使徒の働きを書いたルカによって書かれたという説もあります。
 - i. 内容は、パウロのものだが、ルカが書いたと説もあります。つまり、基本的にルカは、パウロがかつて言った説教を書き留め、それをヘブル人への手紙に書き直したのです。
 - ii. または、パウロがヘブライ語で書いたものをルカがギリシャ語に訳して、署名なしで送ったということもあります。興味深い話で、この本のいくつかのパラメーターと合致するように思えます。
- d. パウロの二回目と三回目の宣教旅行で宣教のパートナーであったシラスは、ある人達から候補者として挙げられています。伝道者ピリポは他の人によって示唆されおり、プリスキラとアキラもローマとのつながりや、ヘブル人への手紙の最後にイタリア人が挨拶を送っている

問う記述から示唆されています。

- e. これらすべて可能性であり、確かなことを知る方法はありません。多くの人は、3世紀の神学者オリゲネスが書いたとされている「この手紙を本当に書いたのは誰なのか、それは神のみぞ知る」という言葉に単純に同意しがります。
7. しかし、私は別の結論を提案したい。結局のところ、私たちは神がヘブル人への手紙の著者であると信じ、信頼しています。
- a. 私たちは、ペテロの手紙第二に書かれている言葉を信じています。
「21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神のことばを語ったのだからです。」(ペテロの手紙第二1章21節)
 - b. 私たちは、神が聖なる敬虔な人に靈感を与え、私たちが読むためにこれらの言葉を書き記されたと信じています。私たちは次のことを信じています。
「16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」(テモテへの手紙第二3章16節-17節)
 - c. 実際に誰がこの手紙を書いたかは、それが私たちへの神の言葉であることを理解し、信じることほど重要ではありません。神が私たちのためにこれらの言葉を書くようにと誰かに靈感を与えたのです。私たちがこれから数か月かけて学ぶことは、神の息吹を受けたものであり、私たちへの神のメッセージなのです。
 - d. そして、これが**神の言葉**だと知っているからこそ、**私たちはそれを信じ**、頼り、その上に私たちの人生を築くことができます。私たちはこの手紙から真理を受け取り、神がこれらの言葉を私たちが読み、私たちが信じ、私たちが実践することを意図しておられることを知りながら私たちの人生に適用することができます。
 - e. 誰がこれらの言葉を書いたのかは分からないかもしれませんが、これらの言葉が主からのものであることは分かっており、私にとってはそれで十分です。
- C. この手紙の受取人を特定しようとする、またしても再び途方に暮れてしまうことになるのはご想像の通りです。
- 1. これは明らかにヘブル人、ユダヤ人に書かれた手紙です。しかし、どのユダヤ人でしょうか？どの地域でしょうか？
 - 2. 多くの人はエルサレムに違いないと考えますが、内的証拠はそれに反すると思わせるかもしれません。
 - a. すでに述べたように、著者も受け取り手も二世信者として同じ境遇にあるようです。イエスを直接聞いたわけではありませんが、主から福音を受け取った他の人々から福音を聞いた人々です。
「3 私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、どうしてのがれることができましょう。この救いは最初主によって語られ、それを聞いた人たちが、確かなものとしてこれを私たちに示し、」

(ヘブル人への手紙 2 章 3 節)

- b. そうすれば、エルサレムの地域のユダヤ人や、おそらくイスラエルの北部のガリラヤ地域のユダヤ人にとっても、この考えは排除されるだろう。
- c. また、この手紙の 6 章 10 節には、受け取り手が愛の働きとして聖徒たちに奉仕したことが書かれています。
「10 神は正しい方であって、あなたがたの行いを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。」(ヘブル人への手紙 6 章 10 節)
- i. この言い回しは、エルサレムの貧しい聖徒たちのために金銭的な贈り物をするを指してよく使われました。だとすれば、この手紙の受け取り手はエルサレムに住むユダヤ人であるはずがないことは明らかです。おそらく、エルサレムに支援を送っていたユダヤ人のグループだったのでしょう。
3. ヘブル人への手紙には、受け取り手のグループの可能性を指す地理的な記述があります。
- a. 先に触れましたが、この手紙の最後に著者は別れの言葉の中で次のように書いています。「24 すべてのあなたがたの指導者たち、また、すべての聖徒たちによろしく言ってください。イタリアから来た人たちが、あなたがたによろしくと言っています。」(ヘブル人への手紙 13 章 24 節)
- b. さて、これはいくつかの異なる方法で理解できると思います。
- i. おそらく著者はイタリアにいて、イタリアにいる著者と一緒にいる人たちが手紙の受け取り手に挨拶を送っていると言っているだけなのでしょう。
- ii. あるいは、著者が見知らぬ土地にイタリアから同行者を連れていて、同胞の挨拶を聞けば喜ぶであろうイタリアの人々、おそらくローマの教会に宛てて手紙を書いているのかもしれませんが。
- iii. ローマから追い出されたユダヤ人が何人かいたこと、そしてパウロがコリントに行った時にそのうちの何人かと会ったことは知っています。使徒の働き 18 章によると、パウロがコリントに入った時、当時のローマ皇帝クラウディオがユダヤ人全員にローマから立ち去るように命じた後、イタリアから来たばかりのアクラとその妻プリスキラに会ったことが記されています。
「2 ここで、アクラというポント生まれのユダヤ人およびその妻プリスキラに出会った。クラウディオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、」(使徒の働き 18 章 2 節)
- iv. つまり、著者のもとには以前イタリアに住んでいたユダヤ人がいて、著者はその人たちを認め、ローマに残っている可能性のある人たち、あるいはかつてローマにいたけれどもイタリア国内の都市の周辺地域に逃れた人たちを励ますために書いているのかも

しれません。

c. ヘブル人への手紙10章に書かれていることを考慮すると、著者がイタリアのユダヤ人に向けて書いているという考えは、さらに重要な意味を持ちます。

i. この手紙の受け取り手たちは、その歩みの初期に、苦しみとの戦いに耐え、避難や苦難によって見世物にされ、また、そのような扱いを受けている人たちの仲間になったこともあり、彼らは、たまたま鎖につながれていた著者に同情し、財産を略奪されたのです。

「34 あなたがたは、捕らえられている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。」(ヘブル人への手紙10章34節)

ii. ヘブル人への手紙の記述は、西暦49年にローマで起こったことと相関関係を持っているようです。ローマでキリスト教徒であるユダヤ人の数が増えるにつれ、彼らはイエスを救世主として説くメッセージを拒絶する他のユダヤ人に頻繁に遭遇しました。不信的なユダヤ人たちは、キリスト教徒のユダヤ人たちと出会うたびに、さまざまな妨害や問題を引き起こしました。

iii. 非宗教的な歴史によれば、ユダヤ人の扇動はローマに問題を引き起こし続けたと記録されています。

iv. 歴史的な記録には、「ユダヤ人がクレストゥスの扇動によって絶えず騒ぎを起こしていたので、彼は彼らをローマから追放した。」クレストゥスとはキリストのことだと多くの歴史家が信じています。

v. ユダヤ人がローマから追い出されたのは、特定のユダヤ人がイエスキリストの話を聞くたびに問題を起こし続けたからです。ですから、皇帝は、彼らをローマから追い出すことに決断したのです。彼らは、家や財産を置き去りにせざるを得なかった、ローマ人によって略奪された。

vi. ヘブル人への手紙10章に書かれていることが同じ出来事について述べているのであれば、ローマに住んでいたユダヤ人、あるいはかつてローマに住んでいて、今はローマの郊外のイタリアに住んでいるユダヤ人に向けて書いているということになります。

d. 著者がイタリアのユダヤ人に宛てて書いたと言うこの考えは、最も重みがあり内部的な証拠となりうる。しかし、それにしても、著者が宛てたユダヤ人のこのグループの場所については、学者たちの間でも意見が分かれています。

D. 次に進みましょう。手紙が出された時期を見ていきましょう。これも、著者が誰で、誰に宛てて書いているのかが分からなければ、特定するのは難しい。

1. 助けとなる1つの証拠は、ヘブル人への手紙13章23節で、テモテが牢獄から解放されたと書かれていることです。

「23 私たちの兄弟テモテが釈放されたことをお知らせします。もし彼が

早く来れば、私は彼といっしょにあなたがたに会えるでしょう。」(ヘブル人への手紙 1 3 章 2 3 節)

2. パウロは西暦 60 年から 62 年にかけてローマに投獄されていました。ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、ピレモンへの手紙によれば、その時パウロと共にました。
 3. もし著者がパウロとして、彼が自由人として書いているのなら、聖書と使徒の働きに基づくと、唯一の可能性のある時期は、パウロが牢獄から解放された後の西暦 62 年後半になります。
 4. パウロが、ピリピでの状況を知るために、テモテをピリピに派遣することを申し出たことは分かっています。ですからパウロは当時は囚人ではなかったに違いありません。パウロが、ピリピ人への手紙を書いたのは、紀元前 62 年初頭のことです。
 5. パウロのテモテへの最初の手紙は、西暦 63 年から 64 年に書かれたと考えられています。つまり、使徒の働きの手紙によりますと、テモテが投獄された可能性があるのは、西暦 62 年後半から 63 年にかけてということになります。
 6. さて、このテモテの投獄は、使徒の働きの手紙ではカバーされていない時間枠を語っている可能性があります。使徒の働きの手紙は、パウロが西暦 62 年に獄中から釈放された後で止まっているので、これはそれより後のことを指している可能性があります。しかし、西暦 69 年か 70 年より後ではありません。
 7. 私たちは、西暦 70 年にエルサレムの町が占領され、神殿が破壊されたことを知っています。そして、ヘブル人への手紙の著者によって、犠牲がまだ行われてことが記されています。全ての神殿で犠牲は、西暦 70 年までに終了しました。
 8. ですから、ヘブル人への手紙の執筆は、おそらく 1 世紀の 60 年代半ばに行われたと考えられます。おそらく、西暦 63 年から 68 年の間のどこかでしょう。
- E. さて、ヘブル人への手紙の背景とこの手紙を書いた著者がこの本を書いた理由について見ていきましょう。
1. ヘブル人への手紙は、まさに選択をすることについて書かれています。My Life Application Bible の聖書の解説書には、ヘブル人への手紙の考え方を、悪い、良い、より良い、一番良いの間の選択の一連としてよく解説されています。
 - a. 良いものか、また悪いものかの選択を迫られた時、「悪いもの」を選ぶのは愚かな人か、誤った考えを持つ人だけです。良いもの(善)は常に勝つべきである。
 - b. しかし、次のレベルになると、良いものとさらに良いものとの間を選択することに、選択はさらに難しくなります。この場合も、論理的な選択は「さらに良いもの」であるように思えますが、その選択は、前者の状況ほど明確ではありません。2つの選択肢の間の違いは、大したことがないように思えるかもしれませんが、「より良いもの」とされるものを選択する理由が納得できないかもしれない、そして、慣れ

親しんだ「良いもの」に留まることが快適で便利だと感じるかもしれませんが、ですから、このように良いものを維持するか、より良いものを選択するかを迫られ、多くの人は今あるものに固執します。なぜなら、結局のところ、それは「悪いもの」ではないからです。

- c. 次の選択はさらに難しいものです。より良いものと一番良いものとのどちらかを選択することです。繰り返しますが、明らかな選択は、常に「一番良いもの」を選択するべきであります。多くの人は何が一番良いものかを見逃して、その代わりに「より良いもの」または単に「良いもの」を選択してしまいます。彼らにとっては、彼らが知っているものに留まる方が良いのです。
 - d. ヘブル人への手紙の著者は、自分たちの人生にとって神の最善以外の何ものでもないことに落ち着くよう、読者を説得しなければならなかった。
 - e. ユダヤ人として、彼らは良い思いをしていました。彼らは神に選ばれた民でした。そして、それで十分だと思う人もいました。新約聖書には、アブラハムの子孫というだけで、自分は大丈夫だと思っていた人々のことが書かれています。彼らは「善良」でした。
 - f. しかし、彼らには単にアブラハムの子孫というだけでなく、もっと良いものがありました。神はまた、彼らが参加できる契約を結んだ。もし彼らが神の律法に従い、神の言葉と戒めを守るなら、神は彼らの神となり、彼らは神の民となる。どうせ大したことはない、と思ってただ好きなように人生を生きるよりも、神との契約に基づいて生きる方が確かに良いのです。
 - g. そして、多くのユダヤ人が律法にできる限り従った。そして、自分たちにとって都合の良いシステムにしてしまいました。彼らは、神の律法を引き延ばす方法を考え出し、神の完全さのしるしにどうしても及ばない時でさえも、その罪を隠すために、動物のいけにえを捧げることができたのです。
 - h. しかし、神はご自分の民のために別のものを持っておられました。それは、より良いものというよりも、神の最高の良いものでした。そして、この手紙の多くの受け取り手たちは、神の最高のものを味わい体験していました。しかし、困難な状況に陥った時、ある者たちは、古いやり方に戻ってしまっていた。彼らは、以前のやり方に戻った方がいいのではないかと考え始めていたのです。
 - i. これがヘブル人への手紙の著者が直面していた問題です。著者は、神の最善のものよりも劣るものに落ち着くことは愚かなことだと、彼らに示そうとしているのです。
2. ヘブル人への手紙は、クリスチャンであるユダヤ人のグループに向けて彼らの信仰を励まし、戒めるために書かれました。
 3. これらのユダヤ人クリスチャンたちは、初心者ではありません。彼らは、新しい信者でも新しい改宗者でもありませんでしたが、しばらくの間主と共に歩んできたようです。
 - a. このことは、著者が彼らに対して、彼らはもう教師になっているはず

だと叱責し、咎めていることから理解できます。しかし、残念なことに、ヘブル人への手紙5章12節に書かれてあるように、神の神託の基本原則を教える人がまだ必要なのです。

「12 あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。」(ヘブル人への手紙5章12節)

4. 先に述べたように、このグループは、福音に立った結果、過去の苦難を見事に耐えてきた。

「32 あなたがたは、光に照らされて後、苦難に会いながら激しい戦いに耐えた初めのころを、思い起こしなさい。」(ヘブル人への手紙10章32節)

5. しかし、このところ、彼らの耳は鈍くなり、心は堅くなり、信仰と行ける神との関係から離れようと誘惑されてる。

「12 兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。」(ヘブル人への手紙3章12節)

6. 彼らは、新たな迫害の波にさらされており、著者はそれを主からの懲らしめと表現しています。

- a. 著者は次のように彼らに書いています。

「5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていました。6 「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」(ヘブル人への手紙12章5節-6節)

7. これらのユダヤ人信者たちは、クリスチャンとして自分たちに向けられた迫害を避ける手段として、ユダヤ教と律法に逆戻りしようとしているように見えました。彼らは、自分たちが「より良いもの」と考えるもののために、神の最善を自ら明け渡しました。

8. 著者は、信仰を堅持するように勧め、キリストの優越性と優位性を思い起こさせるために、彼らに手紙を書いています。

- a. 著者が書いているように、彼はイエスをあらゆるものに重ね合わせ、彼らがユダヤ教での古い生活から望むことのできるあらゆるものに対するイエスの優越性と優位性を示しています。

- b. 著者は、イエスが、その歴史を通してさまざまな方法で彼らの先祖たちに語りかけた預言者たちよりもいかに優れているかを論じています。預言者たちは、神からの啓示を与えられた人に過ぎませんが、イエスキリストは神の啓示そのものであり、すべての権威を持って語られた。

- c. 著者は、イエスが神の全ての御使いたちよりも優れていることを論じています。御使いは単なるしもべであり、メッセンジャーでした。しかし、イエスはまさに神の御子であり、御使いはイエスを礼拝するように命じられました。

- d. 著者は、イエスがモーセよりも優れていることを語っています。モー

セは、家を建てるために神に用いられたが、神の御子であるイエスは家の所有者です。モーセはイエスに仕え、キリストのために家を建てるために用いられました。

- e. 著者は、イエスがヨシュアより優れているかについて語っています。ヨシュアは、イスラエルの民を約束の地に導いたが、神が約束された安息の地に彼らを導くことはありませんでした。イエスは、ヨシュアよりも偉大である。なぜなら、イエスは彼らに、終わりのない実りのない律法の働きから休み機会を提供してくださるからです。
- f. 著者は、イエスがアロンや幕屋や神殿に仕えた他の全ての大祭司よりも偉大であることを、多くの時間を費やして説明しています。イエスは、私たちの偉大な大祭司であり、アロンの欠点のある血筋からではなく、メルキゼデクの偉大な血筋から出た人です。
- g. 著者は、イエスがいかに家長たち、アブラハム、イサク、そしてヤコブよりも偉大であるかを語っています。アブラハムがメルキゼデクに什分の一を捧げたことによって、アブラハムは二人のうちでより小さい者であることが証明されました。そして、イエスは始まりの終わりもないメルキゼデクの血筋を通してこられたのですから、イエスは、アブラハムや彼を通して来たすべての人よりも偉大なのです。
- h. イエスは、私たちが神に近づくことができる、より良い希望を与えてくださる。古いシステムは弱く、有益ではありませんでした。律法は何一つ完全にはできませんでしたが、キリストを信じる信仰によって、神が私たちに完全にさせ、神が私たちのうちに始められた働きを完成させてくださるといふ神の約束があります。
- i. イエスは、より良い契約の保証人です。古い契約には欠陥があり、置き換える必要がありました。イエスは、新しい契約を与えてくださる。それは、イエスの砕かれた身体、流された血、そしてイエスの復活を土台とする契約です。新しい契約は、律法を守ることを強制するものではなく、神の驚くべき恵みを経験させてくれるものなのです。
- j. イエスは、幕屋や地上の聖所よりも優れています。それらは、イエスが私たちのために入り、備えてくださった天国の聖所に影に過ぎませんでした。幕屋は、イエスが天国で治める本物を影で表すために特別に作られました。
- k. イエスは、より優れた犠牲です。古いユダヤ教のシステムによる動物のいけにえは、罪を永久に取り除くことはできませんでした。一時的に罪を覆い隠すことしかできませんでした。
 - i. 祭司たちは、自分たちの罪を覆い隠そうと、日々、年を追うごとに、いけにえを捧げなければなりませんでした。しかし、これらのいけにえでは不十分でした。雄牛や山羊の血で私たちの罪を取り除かれることはあり得ませんでした。

「4 雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。」(ヘブル人への手紙 10章4節)
 - ii. 祭司たちが動物のいけにえを捧げたのとは対照的に、イエスはご自身の完全な穢れのない生涯を、一度きりのいけにえとしてささ

げられました。ヘブル人への手紙10章14節によれば次のよう
にあります。

「14 キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物に
よって、永遠に全うされたのです。」(ヘブル人への手紙10章1
4節)

- l. これらのユダヤ人信者たちが、ユダヤ教の古いやり方引き戻される可
能性のあるあらゆるものは、キリストより劣っていました。彼らが律
法通して行ったすべてのそれらのことは、キリストの現実を指し示す
影や絵に過ぎなかったのです。
 - m. なぜ人は神の現実を離れて、一時的な劣ったものの影に仕えようとす
るのでしょうか？それは意味のなさないことであり、それがヘブル人
への手紙のメッセージです。
 - n. イエスはすべてにまさります。イエスは最高であり、これ以上のもの
はなく、これ以上の人はいません。
9. そして、このことは私たちにも思い起させる必要があることだと思います。
律法主義に引き戻されたり、律法に立ち返る危険はないかもしれませんが、
現在の多くの人は、それがあなたにとってどのようなものであったにせよ、
昔の古い生活に戻ろうと誘惑されています。
- a. ヘブル人への手紙に登場するこれらの人々のように、律法主義やモー
セの律法に従うことではないのかもしれませんが、しかし、もしかした
ら、あなたが主との関係を持つ前にしていたことが、今もあなたの心
を引き付けているのかもしれませんが、おそらくあなたは、キリストを
信じるようになる前、あるいは神との関係を真剣に受け止める前のや
り方に戻りたいという衝動を感じているかもしれません。
 - b. ヘブル人への手紙の著者が聞き手に語っているように、私からも言わ
せてもらいます。あなたは後悔することになります。キリストにあっ
て、あなたは神の最高のものを手にしています。イエス・キリストと
の関係や歩みほど、優れていて価値のあるものは他にありません。
 - c. 騙されてはいけません。昔のやり方に戻る誘惑に負けないで。信仰を
保ち、神の愛と恵みの中で前進し続けなさい。
 - d. 神はあなたを見届け、あなたのうちに始められた働きを完成させてく
ださい。神は、決してあなたを離れず、あなたを見捨てません。
 - e. キリストにあって、あなたは王の息子であり娘です。そして、諦めず、
キリストの恵みと愛と憐みと力に信頼し続ける私たちには、天国での
永遠が待っています。アーメンですね？アーメン。